

か い と
垣内遺跡 現地説明会資料

かじこうぼうあと
～ 弥生時代後期の鍛冶工房跡 ～



平成 21年 1月 25日 (日)

淡路市教育委員会

I 垣内遺跡とは

1. 垣内遺跡の発見

垣内遺跡は、兵庫県淡路市黒谷の五斗長地区にある（図1参照）弥生時代後期（西暦50～220年頃）と中世（西暦1200～1400年頃）の遺跡で、平成13～16年に行った分布調査で発見されました。遺跡は、今の海岸から直線距離で約3km、標高約200mの山の上にあります（図2参照）、東西に伸びる尾根を中心に、南北約100m、東西約500mの範囲に広がっているものと予想されます。

2. 垣内遺跡の発掘調査

五斗長地区では、農業生産法人等育成緊急整備事業（ほ場整備事業）に伴い、平成18～21年度の4ヶ年で4遺跡20,484㎡の発掘調査を計画していますが、そのうち、垣内遺跡では平成19・20年度の2ヶ年で17,884㎡の調査を実施中です。（図3参照）

3. 平成19年度の調査

平成19年度の調査では、弥生時代後期の^{たてあなたてもとのあと}竪穴建物跡6棟と^{ほったてばしらたてもとのあと}掘立柱建物跡1棟を発見し、その内、2棟の^{たてあなたてもとのあと}竪穴建物跡で鉄器を作っていたことがわかりました。また、最も古い時期（後期初め頃）の^{たてあなたてもとのあと}竪穴建物跡1棟では、石器を作っていたこともわかりました。このことから、当時の人々が使っていた道具が、石から鉄へ移り変わる様子を詳しく知ることができるほか、鉄の道具を作るムラとしては兵庫県内で最も古い時期の遺跡として、大切な遺跡であることがわかりました。

II 平成20年度の調査成果

1. 調査のあらまし

本年度は、平成20年5月～平成21年2月末までの予定で、7,776㎡の発掘調査を行っています。

今回の調査では、弥生時代後期後半の^{たてあなたてもとのあと}竪穴建物跡11棟を確認しました。建物跡の平面形は9棟が円形、2棟が方形をしています。そのうち8棟（円形7棟、方形1棟）の床面に強い熱を受けて赤く焼けている炉跡が確認されました。これらの^{たてあなたてもとのあと}竪穴建物跡を中心に、^{てつぞく}鉄鑊（やじり）をはじめとする鉄製品やその未製品、鉄器作りの素材となる鉄片、鉄器作りの際に^{たがね}鋳で鉄板を裁断してできた鉄片など約45点の鉄製品が出土しました。また、石鎚（ハンマー）や鉄床石、砥石などの鉄器作りに使ったと考えられる石製工具も数多く出土しています。これらのことから、今回確認された^{たてあなたてもとのあと}竪穴建物跡の多くは弥生時代後期に鉄器を作っていた^{かじこうぼう}鍛冶工房の跡であると考えられます。

2. 確認された^{たてあなたてもとのあと}竪穴建物跡

このあとは、見学していただく順路に沿って、それぞれの^{たてもとのあと}建物跡の内容を説明します。（図4参照）



④-3 地区全景

① 竪穴建物跡 SH-307

この建物跡は、全体の約2/3が地面の下に埋まっております。復元すると直径が約9.0mの円形の建物跡と予想できます。床面には4箇所の炉跡が発見されています。炉跡の形は不定形で、大きなもので160×75cmの大きさがあります。



② 竪穴建物跡 SH-306

南半分が崩れて無くなっているため、半円形の姿をした建物跡です。元の形に復元すると直径が約5.5mの円形の建物跡になります。床面の中央やや東よりの位置に楕円形をした炉跡が1箇所あります。床面を磁石で調査したところ、ごく小さな鉄片が発見されました。炉跡は楕円形で、80×55cmの大きさです。



SH-307 (上)・SH-306 (下)



③ 竪穴建物跡 SH-305

直径が5.6m、円形で4本柱の建物跡です。この建物跡には炉跡は確認されていません。中央の穴も浅く、工房跡と考えられる建物とは少し異なっています。多くの工房跡に囲まれた中で、それらとは違った役割を担っていた建物跡かもしれません。

SH-305

④ 竪穴建物跡 SH-304

平面の形が方形の建物跡で、一辺の長さが4.2×3.0mの小さな建物跡です。2本柱で、床面の中央部に炉跡が1箇所、そのすぐ隣で土坑とそれから南東隅に伸びる溝があります。壁際で石鎚と砥石、鉄製品1点が発見されています。大型の工房跡と違った役割を果たしたのかもしれませんが。炉跡の大きさは、75×50cmです。



SH-304



砥石



石鎚

⑤ 竪穴建物跡 SH-303

今回確認した建物跡の中では、2番目の大きさの建物跡です。形は円形で直径が9.7m、床面には3箇所の炉跡があります。鉄製品が5点、石鎚などが発見されました。その内、全長約20cmの大型鉄製品が北側の壁際で発見されています。

炉跡の大きさは、大きなもので100×90cm、110×80cmの大きさがあります。

⑥ 竪穴建物跡 SH-302

今回確認した建物跡の中では、最も大きな建物跡です。円形で、直径が10.5mあり、床面には10箇所の炉跡が確認されました。壁際に掘った溝や柱跡が二重になっていることから少なくとも一回の建て替えを行っていると思われる。大きくなった建物跡は10本柱で、普通の建物跡に比べて柱が壁近く掘られている

特徴があります。火を使う作業のため、建物の中を広くしたかったのかもしれませんが、この建物跡からは、鉄製品が12点、石鎚、鉄床石などが発見されています。



SH-303



SH-302

⑦ 竪穴建物跡 SH-308・309

SH-308と309はその一部が重なる形で発見されました。重なっている状況から、SH-309は308よりも古い建物跡であることがわかります。SH-309の床面に3箇所以上、SH-308には2箇所以上の炉跡が確認されています。炉跡の大きさはいずれも径約60cm程度と、ほぼ同じ大きさをしています。この建物跡からは、鉄片1点と石鎚が出土しています。



⑧ 竪穴建物跡 SH-310

北西の半分が水田を作る際に削られたため、半円形をしています。床面には、たくさんの焼けた材木が倒れており、火災で屋根が焼け落ちたことがわかります。よく観察すると、材木は放射状に広がっており、当時の屋根の構造を想像することができます。



⑨ 竪穴建物跡 SH-301・311

SH-301は円形で、2箇所に張り出しがみられる建物跡です。床面には炉跡があり、石鎚、鉄床石が出土しました。

SH-311は一辺が3.9mの方形の建物跡で、鉄床石に似た平らな石が発見されましたが炉跡が確認されていないため、工房跡かどうかはよくわかりません。

SH-308・309(上) SH-310(下)

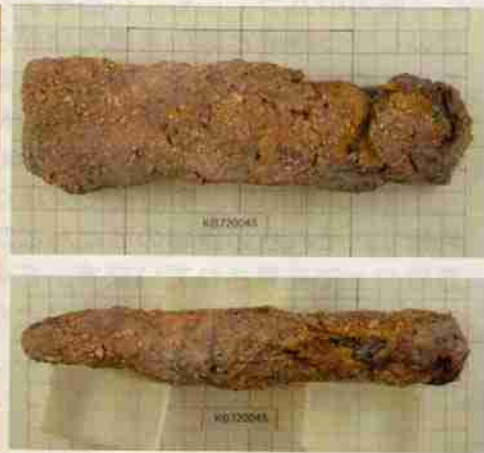
2. 出土した遺物

① 鉄製品

今回の調査では、約45点の鉄製品が出土しました。錆がひどく、クリーニングなどの作業を行わなければ詳しいことはわかりませんが、鉄鍬（やじり）のほか、素材とみられる鉄片や加工の際に出る裁断片などが多くみられます。その中で、SH-303から出土した大型鉄製品は、錆が付着した状態ではありますが、全長が約20.0cm、幅約4.0cm～5.0cm、厚さ3cm、重量564gと非常に重厚な作りの鉄製品です。



出土鉄製品



大型鉄製品

② 鍛冶工具

鉄器作り（鍛冶作業）に使ったとみられる石製の道具もたくさん見つっています。鉄を打ち延ばす石鍬（ハンマー）や台に使った鉄床石、砥石などがあります。特に、石鍬は材質や大きさなど種類が豊富で、作業の目的に応じて種類を撰んだのかもしれませんが。

石鍬など石製鍛冶工具（右）



③ 土器

数多くの弥生土器が出土していますが、この遺跡で特徴的な土器として「小型土器」があります。作りや形は普通の弥生土器そっくりですが、高さが5cm～10cmと小さく、実用品とは考えにくい土器です。お祀りなど、何か特別な用途に使用された土器と考えられます。

SH-202 (H19) 出土小型土器（右）



Ⅲ まとめ

今回の調査では、鉄製品やその未製品、鉄素材や鉄器作りの際に出る鉄片などとともに鉄器作りに使ったとみられる石製工具類、多数の炉跡を有する建物跡（鍛冶工房跡）が発見されました。これらの内容は、当時の鉄器作りの様子を具体的に知ることができる貴重な資料となります。

また、平成19年度の調査をあわせると、全部で10棟の鍛冶工房跡が存在した可能性があります。確認した全建物跡17棟に占める鍛冶工房の割合が高く、まさに「鍛冶のムラ」ともよべる様子がみられます。今回の調査で、これらの工房跡が少しずつ時期と場所を違えながら、弥生時代の終わりまで継続して営まれていたことが明らかとなり、安定的に鉄器作りを行っていたものと考えられます。

当時、とても貴重な「鉄」の素材を手に入れ、最先端の技術とも言うべき鍛冶の技術を学び取り、懸命に鉄器を作り続けた人々の姿が想像されます。

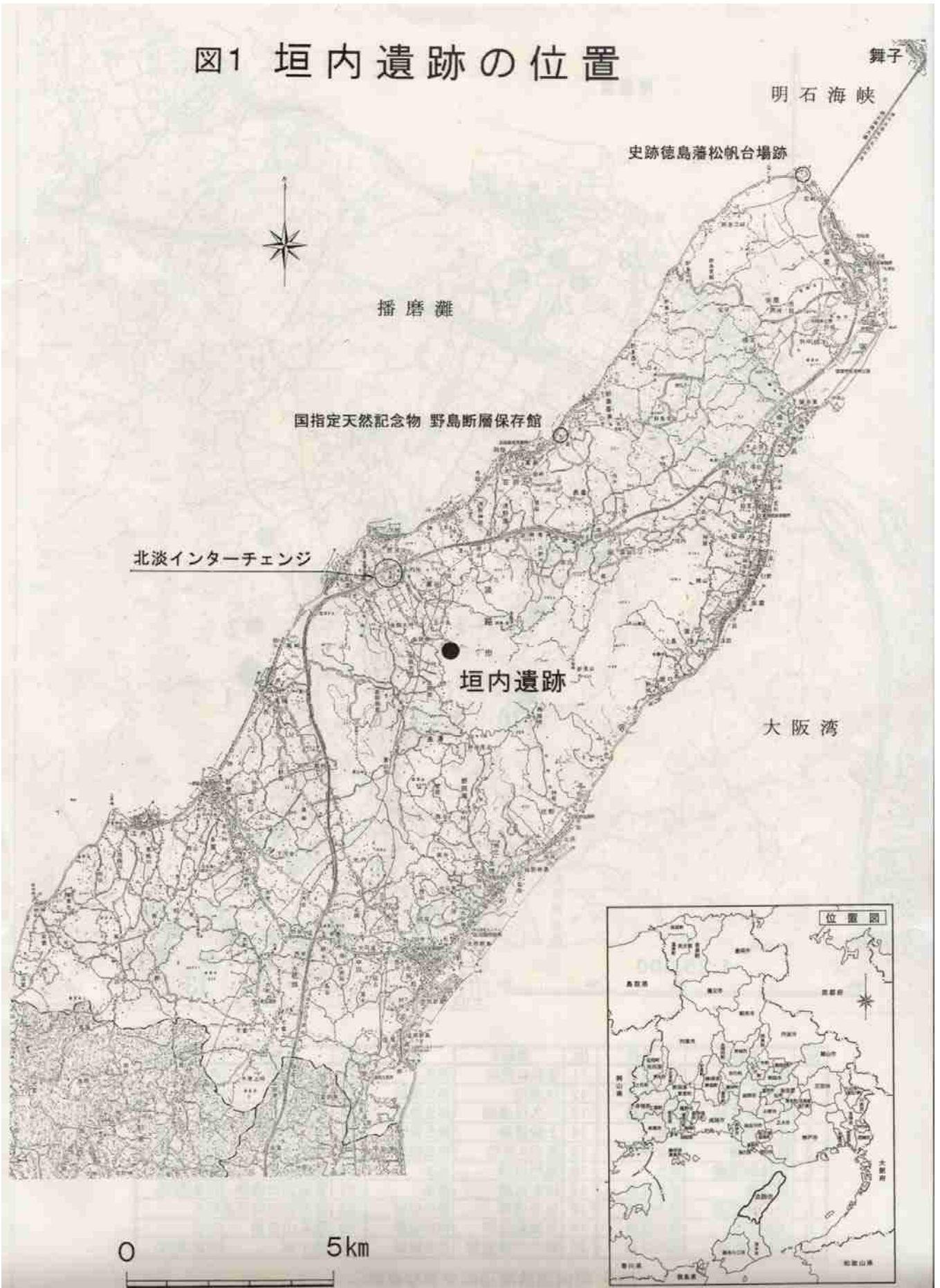
淡路島北部では、中期まで少なかった遺跡の数が、後期に急増する現象がみられます。それらの遺跡のほとんどが今回の垣内遺跡のような標高100～200mの丘陵の上で発見されています。このような現象の背景には、今回の調査で明らかになった鉄器の製作といったことが原因の一つであった可能性もあり、弥生時代後期における淡路島を考える上で、重要な調査成果といえます。

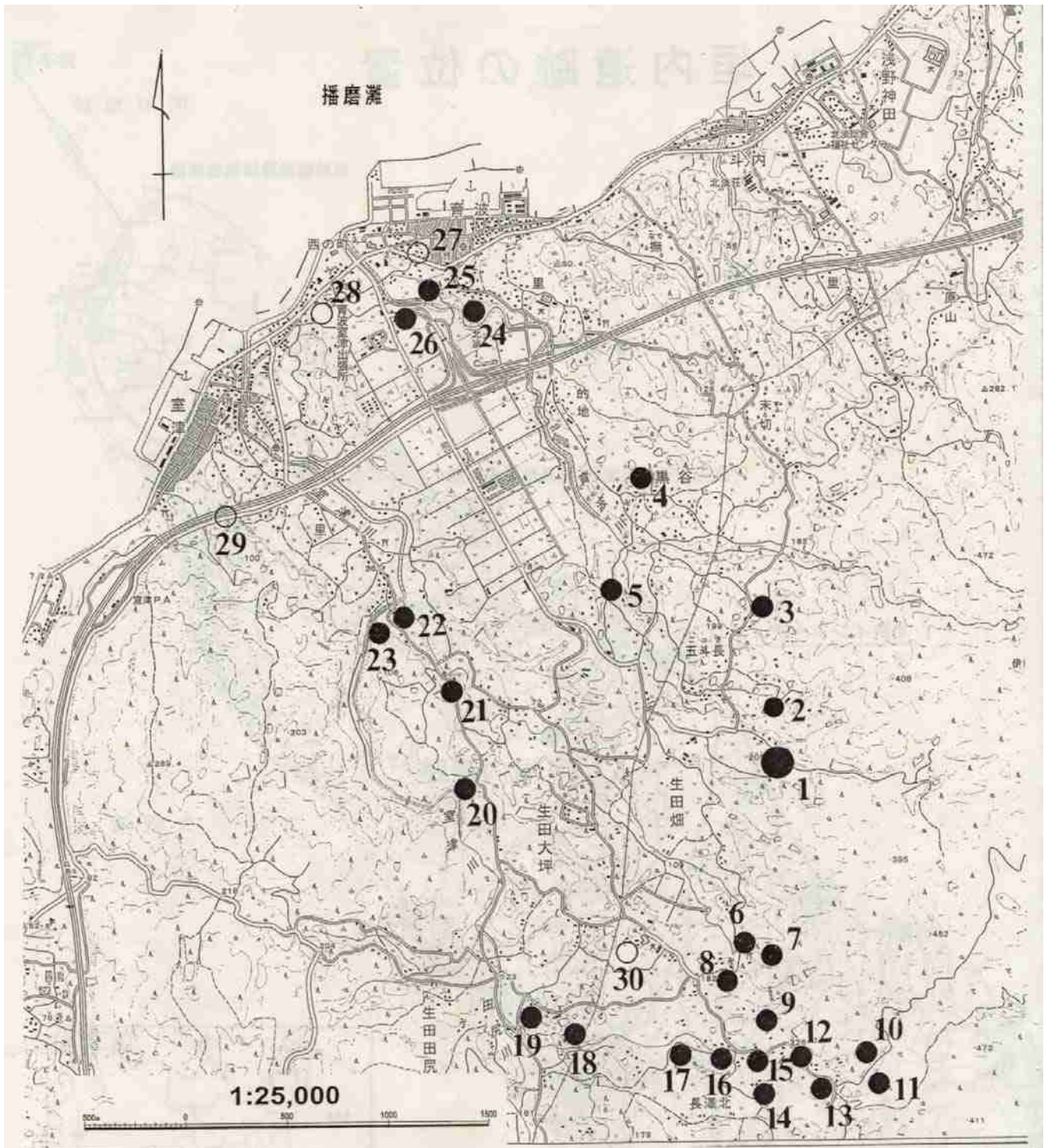


北淡路における弥生時代の遺跡数の推移

2000.12 作成

図1 垣内遺跡の位置





No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代
1	垣内遺跡	弥生後期	11	笠松B遺跡	弥生	21	杭田遺跡	弥生
2	山ノ神遺跡	弥生後期	12	林遺跡	弥生後期	22	野瀬遺跡	弥生
3	妙神谷遺跡	弥生後期	13	小久保遺跡	弥生後期	23	室津土井遺跡	弥生
4	長守遺跡	弥生	14	上条遺跡	弥生後期	24	全戸B遺跡	弥生・中世
5	黒谷小田	弥生後期	15	笠松A遺跡	弥生後期	25	寺門遺跡	弥生・中世
6	大浅田遺跡	弥生	16	酒屋遺跡	弥生	26	掛内遺跡	弥生・中世
7	林遺跡	弥生後期	17	松本遺跡	弥生	27	育波浜田遺跡	古墳(製塩)
8	小久保遺跡	弥生後期	18	色目遺跡	弥生後期	28	育波堂の前遺跡	縄文
9	上条遺跡	弥生後期	19	生田畑遺跡	弥生後期	29	築鼻山古墳	古墳
10	笠松A遺跡	弥生後期	20	鑄文字原遺跡	弥生後期	30	備中館	中世(城館)

図2 垣内遺跡周辺の主要な遺跡

※ ●は弥生時代の遺跡。弥生時代以外の遺跡は主な遺跡のみ掲載。

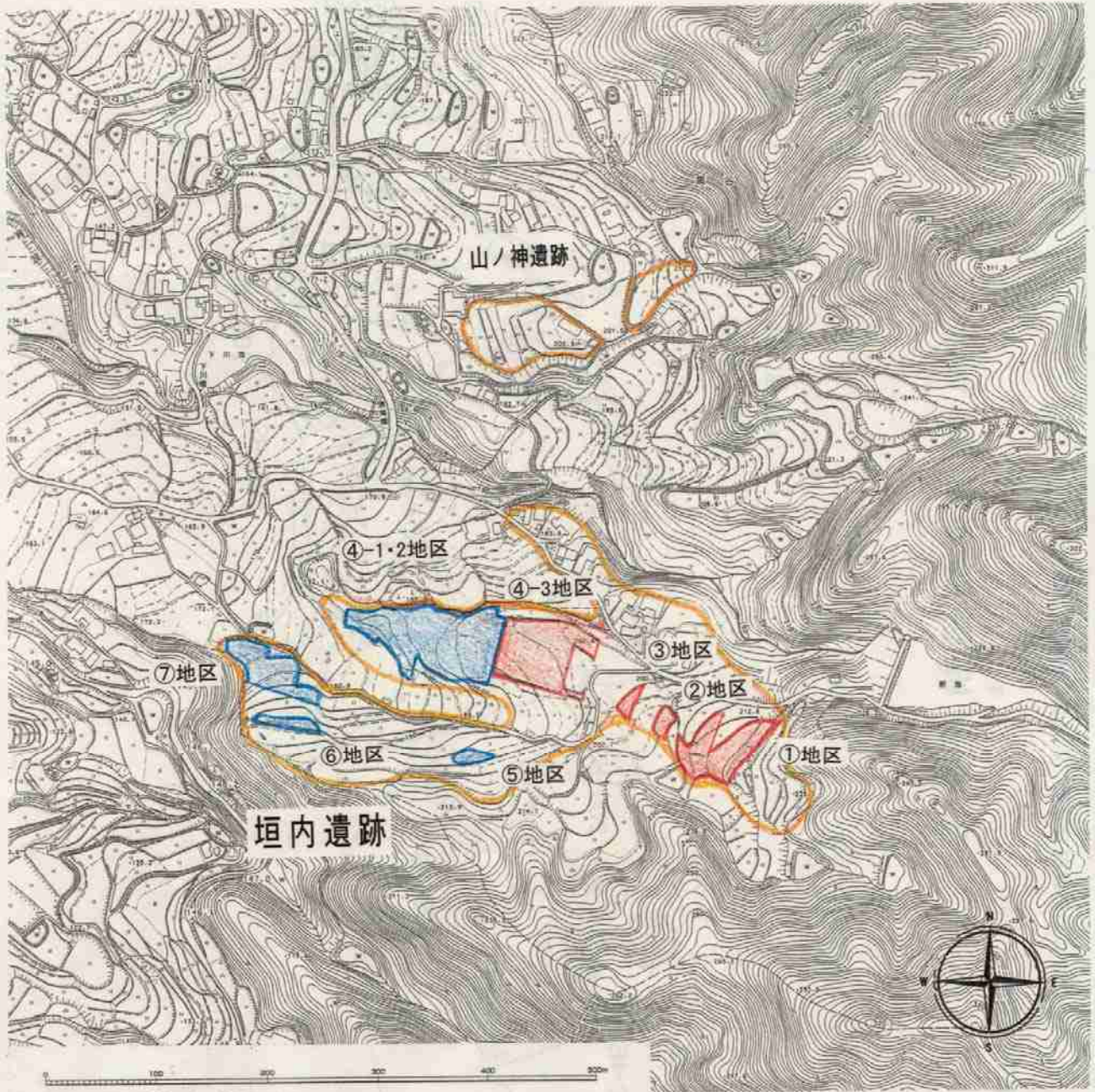


図3 垣内遺跡調査区配置図

- 凡 例
- … 遺跡の範囲
 - … 平成19年度調査範囲
 - … 平成20年度調査範囲



図4 垣内遺跡遺構平面図

※ 竪穴建物跡はSHで、掘立柱建物跡はSBで表示

④-1・2地区
(平成19年度調査)